

序 ヴィクトル・セガレンの生涯と作品

医師であると同時に考古学者、海軍軍医であると同時に中国学者、探検家であると同時に美術批評家、いやそれ以上に旅人であると同時に詩人・作家であったヴィクトル・セガレン Victor Segalen（一八七八—一九一九）。生前刊行された書籍はたったの三冊（『記憶なき民』『碑』『絵画』）。ほとんどの作品が未完のまま残された。しかし、そうであるがゆえに、かれの著作はわたしたちを刺激してやまない。いわゆるエグゾティスム（異国趣味）華やかなりし時代の只中で、エグゾティスムの価値転換を図ったセガレン。かれの脳裏を去来するものは何だったのか。

セガレンが生きた十九世紀後半から二十世紀初頭のフランスは、普仏戦争、パリ・コミューン後、第三共和政が成立した時代であり、他方、第二次植民地活動が活発化する時代であった。「外」への欲望が渦巻く時代であり、国内では万国博覧会が十一年ごとに開催され（一八六七、七八、八九、一

九〇〇）、国外では「文明化」（とキリスト教化）の使命のもと、広義の「オリエント」（アフリカ、インドシナ、ポリネシア）支配が加速されていった。それは、空間的・時間的「遠方」に向かう旅であると同時に、想像的・夢想的「遠方」——内なる「外」——へ向かう旅でもあった。いうならば、実証主義・写実主義の時代であり、象徴主義・神秘主義の時代であった。文化史的にはベル・エポックと呼ばれるが、その内実は、もろもろの分野における近代から現代への過渡期ということができよう。わけても思想や科学あるいは美術や音楽の分野でそれは顕著だが、一九〇五年の政教分離法（教会と国家の分離）の成立こそ、その象徴的出来事とみなされる（植民地には厳密には適用されていないかったとはいえ）。進歩史観、合理主義に代表される西洋近代への疑義・検討こそ、脱近代を志向する人々の共通項であった。セガレンの時代とは、ゴーガンの時代であり、ドビュッシーの時代であり、クロードルの時代であった。脱近代を見据えつつ、前近代からも目をそむけず、いわば「近代」を挟み撃ちすること。植民地的なものをはるかに凌駕するセガレンの「エグゾティスム」。その射程は思いのほか広く深い。

タヒチまで

一八七八年一月十四日、セガレンはブルターニュ半島西端の港湾都市ブレスト（マシオン通り一七番地）に生まれた。本名はヴィクトル・ジョゼフ・アンブロワーズ・デジレ。セガレンという姓は、ブレスト周辺の百姓であった父の母方のそれである。父と母はともに小学校の教師であったが、父

はセガレン出生時、急遽、海軍主計局の書記＝帳簿係に職を変えている（社会的体面からだろうか）。一方、「おまえはほかの子とは違う」が母親の口癖だった。温厚な父親、どちらかといえば目立たない影の薄い父親に対し、専制的ともいえる母親は偏狭なクリスチャンで金銭にうるさく、子供の教育にもたいへん厳しかった。ちなみに、セガレン元来の姓は *Segalen* で、かれが自分の姓からアクサン・テギュを消し去り、「レン」とブルトン風の発音に変えるのは『碑』（一九一二）出版以降である。いうならばケルト的伝統の再発見であり、セガレンとはブルトン語で「ライ麦の穂」を意味する。

一八八八年にイエズス会系の私立中学校ノートルダム・ド・ボン＝スクールに入学。もちろん、母親の意向だった。一方、セガレンの夢は海軍士官（海軍に入ること）だった。しかし、母親の反対、成績不振（とくに数学）、そして近視のため断念。海軍医師を選択する。ブレストのリセ、レンヌ大学、ブレストの海軍医学付属校を経て、一八九八年六月にボルドー海軍衛生学校に入学。浪人時代はほとんど勉強せず、音楽とサイクリングに興じていたようだが、寄宿生として入学したあとの学生生活は、一転して厳格な軍事教育のもと、音楽（コンサートと社交パーティ）だけが気晴らしだったらしい。勉強嫌いは高じるばかりだが、その間も規則正しく家族に手紙を書いている（週に二度も！）。医学学校の礼拝堂司祭のルリエーヴルを通して、母親の管理の眼が光っていたからだ。かくして、母親から逃れること、いや母親に代表されるカトリック的世界から逃れること。あるいは、ブルターニュへの愛着とそこからの離脱。かれの人生の第一歩はそこから始まったといっている。

セガレンに転機が訪れるのは、翌一九九年五月。本格的な神経障害（鬱病の発作）を患ってからだ。その原因の一つとして、上流階級の十九歳の娘マリー・ギャックとの関係を母親が心配し、交際を頑

として認めなかったことが挙げられる。ともあれ、同年八月、作家ジョリス＝カルル・ユイスマンスと接見する機会を得、セガレンはかれに魅了され、文学と宗教、いや反教権主義と神秘主義の和解を夢想する。そして、はじめての物語「アルヴォールを通つて」(「海の国への旅」という意味のブルトン語)を書きあげる。後年、セガレンはユイスマンスへの愛を語りながら、かれの「神秘主義とその断念」を「極端に危険で不吉な」例として告発しているが(一九〇七年十月八日のクロード・ドビュッシーとの対話)、とりわけ「象徴主義のバイブル」『さかしまに』(一八八四)によって、セガレンがポール・ゴーガンやギュスタヴ・モローの名を知ったことはおそらくまちがいない。世界を見ることしか考えていないセガレンのような人間と、閉ざされた夢想の世界にのみ生きようとするデ・ゼッサントの世界は、一見相容れないように思われるが、「周りの世界の醜さと凡庸さの拒否」という一点で両者は結びつく。デ・ゼッサントは、落伍者ではなく、超文明人とみなされる。ただしセガレンは、世界から身をひくことなく、凡庸さを避けるべく、世界の、いや感覚の無限の多様性を目指すことになるのだが。こういった象徴主義理論の起源にあるのが、有名なシャルル・ボードレーールの「万物照応の理論」であり、アルチュール・ランボールの「見者の理論」であることは容易に見てとれるが、この時期のセガレンにおそらく詩人としての自覚はまだなかった。しかし、神経衰弱・鬱病の発作は、今後いくつかの作品のなかで展開されることになる。「ドツベルゲンガー三重人格」「分身」といった重要なテーマをセガレンに付与することになるだろう。要は精神的資質に関わる「神経医学」「精神医学」の問題であり、まさにかれは時代の趨勢を先取りしていた感がある。すくなくとも、時代の動き——ジークムント・フロイトやピエール・ジャンネの研究——に敏感であった。かつ、一八九九年も押し迫って知り合

った税官吏の娘でコルシカ島出身のグザヴィエール・ロンカ、愛称サヴェリアとの恋愛も、この時期の特筆すべき出来事であろう。とはいえ、二人の諍いはたえることなく、セガレンの神経衰弱はますます悪化するが、サヴェリアとの関係はボルドーを離れるまで続いた。

一九〇二年一月二十九日、セガレンは医学論文「自然主義作家における医学的考察」を提出し、受理される。かれは両親と友人のために、『文学における臨床医たち』というタイトルで私家版を五十部編集・出版したが、レミ・ド・グルモンの推薦で、四月に雑誌『メルキュール・ド・フランス』に掲載された（「共感覚と象徴派」）。いずれも、同時代文学における神経症の研究で、いわば自分が経験した神経衰弱がそのまま論文に反映されているといっている。かれは、「象徴派」の詩的類推に通ずる感覚的類推の体系的展開から出発し、色と音という異なる感覚のあいだの類推的関連性として現れる「共感覚」を人間の感覚能力の進化の一段階として位置づけ、そこに退化の徴候しかみない数多くの科学者たちの議論（たとえばマックス・ノルダウ）を批判する。この頃のかれにとって、いまだ知られざる感覚・精神の領域のメカニズムを探るというよりは、端的に「感覚的・精神的に充実した状態」に達することだけが問題であったようだ。いわく「刺激剤」を擁護すること。感覚間の共鳴もしくは越境ともいうべき「共感覚は、無害な阿片に属する」（アンリ・ブイエ）。セガレンは一九〇一年十月にはじめて阿片を吸ったとされているが、オセアニア、中国に行ってからたびたび阿片を吸うようになる。この時代、阿片の服用は海軍の世界ではきわめてありふれた事柄に属し、ある種のスノビズムのあらわれであったようだ。後年、セガレンは「阿片の平和」（一九〇七）と題する論文を発表し、阿片服用を擁護した。阿片は感覚を鋭敏にするだけで理性に悪影響を与えるものではなく、む